

大阪湾で「鰹」が釣れるかという現実的な問題は置いておくとして、かくして「海界」を過ぎてしまった島子は、とうとう「海神の神の娘子」に出会ってしまったという。一目で惹かれあつた二人は、夫婦の契りを交わし、「海神の神の宮」で「老」もなく、「死」もない生活を送ることになる。

しかし、魔がさすとはこういうことか、島子はふと故郷に置いてきた父や母のことを思い出してしまったのである。こうなったら、一旦故郷に帰らねば気持ちがおさまらない。そこで、島子は妻に「ちよと家に帰って父や母に私の様子を告げてちょう。いや、なに、明日にでも帰ってくるからね」と言った。ではと妻が島子に渡したのは一つの「櫛笥」。ちなみに「櫛笥」は櫛を入れる箱だ。当時の櫛は菌の長い手箒のような形をしていたから、箱も小さくはなかつたろう。妻は島子

に言う、「いいですか、帰ってきて、今のうちに私に逢いたければ、これを決して開いてはいけませんよ」と。ところで、浦島子が故郷に帰ってみると、家もなく、里も様子が変わつてた。我が家はこのあたりだったと思つて見ても、垣根も無くなつてしまつていた。たった三年の間にこんなに変わるものか。この櫛笥を開けてみると、もとの通りになるのではないかと考えた島子は開けてはならないと言われた櫛笥をとどうとう開けてしまふのだ。櫛笥からは白雲が立ち、妻の居る「常世」へとたなびいていった。しまつたと思つた島子はその白雲を追つて走り、袖振り、臥し、転びしたが、取り返しはつかず、あつたという間に老人となつて死んでしまつたという。反歌に「おそやこの君」とあるから作者の高橋虫麻呂は、この浦島子を「馬鹿だなあ

と慨嘆しているわけである。さて、この話は読者の皆さんが知っている浦島太郎の話の原型であるが、いささか話の内容が違つていることに気づいただろう。冒頭に、いじめられていた亀を助けて竜宮城へ行くという件はない、「鯛や鯛の舞い踊り」などと言つたシーンもない。また、浦島太郎の最後は、どうなつていたかと考えた方もいたろう。

同時代の伝承は『日本書紀』と『丹後風土記』にもある。そちらには、島子が「大亀」（『日本書紀』雄略天皇二十二年条）や「五色の亀」（『丹後国風土記』）を釣りに、これが乙女に変化して、契りを結ぶことになつていたりする。「伝承」の間に話が微妙に変型しているのである。しかし、読者の皆さんが知っている浦島太郎の話には程遠いだろう。その点については次回に記す。

◇普通は筒部と花ヒラ部は白色で中央が紅紫色ですが、
①筒部が紅紫色のものや
②写真のように花ヒラ部分に薄紅色が入つた花もあります。
（撮影・文 中村 毅人）



高尾山
四季の草花

ヘクソカブラ 屁糞蔓
アカネ科・ヘクソカブラ属

『万葉集』から見る
日本の古典 ⑩
獨協大学特任教授 城崎 陽子

浦島太郎 その1



浦島子を祀る宇良神社(京都市府与謝郡伊根町)

先回まで、『万葉集』の「龍田山の死人を見悲傷して作らず歌」との異伝関係から様々な聖徳太子伝承を見てきた。今回は「伝承」という言葉に引かれ、『万葉集』に収められている作品の中でも「水江の浦島子」の歌を見ていきたい。さて、「水江の浦島子」とはどこかで聞いたことがある名前だと思われた方も多いただろう。何を隠そう、「浦島太郎」の『万葉集』バージョンなのだ。まずは『万葉集』に載る作品をみてみよう。

水江の浦島子を詠む
一首「并せて短歌」

春の日の霞める時に
墨吉の岸に出で居て
釣舟のとをらふ見れば
古のこそ思ほゆる
水江の浦島子が
鰹釣り 鯛釣り 誇り
七日まで 家にも来
ずて 海界を 過ぎて
漕ぎ行くに 海神の
神の娘子に たまさか

にい漕ぎ向かひ相
とぶらひ 言成りしか
ば かさ結び 常世に
至り 海神の 神の宮
の内の重の 妙なる
殿に 携はり 二人
入り居て 老いもせず
死にもせずして 永き
世に ありけるものを
世の中の 愚か人の
我妹子に 告りて 語
らくしまし しくは 家
に 帰りて 父母に 事
も 語らひ 明日のごと
我は 来なむと 言ひけ
れば 妹が 言へらく
常世 辺に また 帰り
来て 今のごと 逢は
むと ならば この 櫛笥
開くなゆめと せこら
くに 堅めし ことを
墨吉に 帰り来りて
家見れど 家も 見か
ねて 里見れど 見も
見かねて 怪しみと
そこに 思はく 家ゆ出
でて 三年の間に 垣
もなく 家も 失せめや
と この 箱を 開きて
見てば もとの ごと
家は あらむと 玉櫛
笥 少し 開くに 白

雲の箱より出でて
常世辺に たなびきぬ
れば 立ち走り 叫び
袖振り 臥いまるび
足ずりし つつ たちま
ちに 心消 失せぬ 若
かりし 肌も 皺みぬ
黒かりし 髪も 白けぬ
ゆなゆなは 息さへ 絶
えて 後遂に 命死に
ける 水江の 浦島子
が 家所見ゆ
(巻九・二七四〇番歌)

反歌

常世辺に
住むべきものを
剣大刀
汝が心から
おそやこの君
(巻九・一七四一番歌)

題詞にある「水江」は三句目の「墨吉」と同じく、現在の大阪府大阪市住吉区の住吉大社付近を指していると考えよ。そこには「浦島子」という人物が、七日間、家に帰ることもなく「鰹」や「鯛」を釣つたという。